

「まなびや連歌」の提唱と教材化 —国語科における指導方法の開発と授業実践—

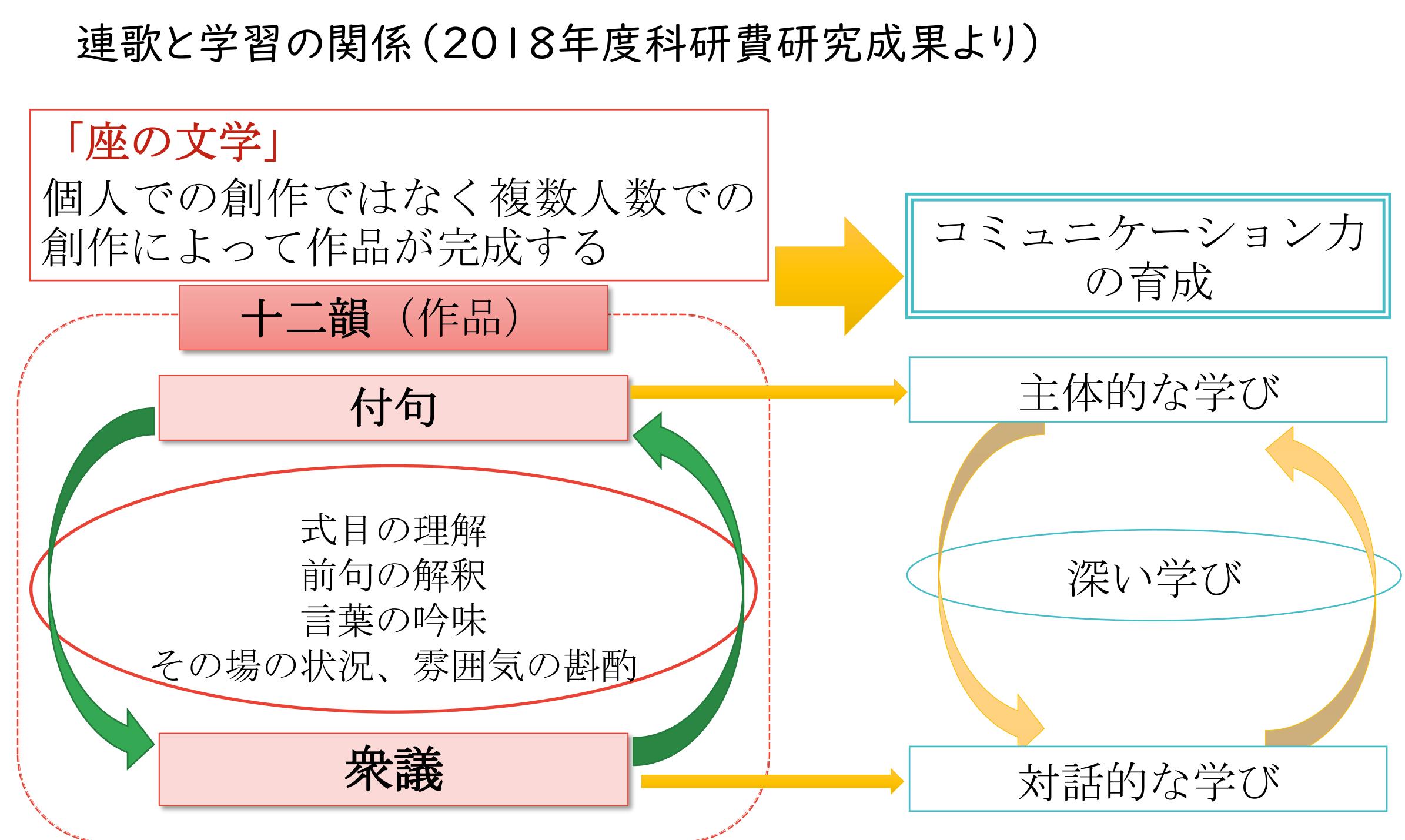
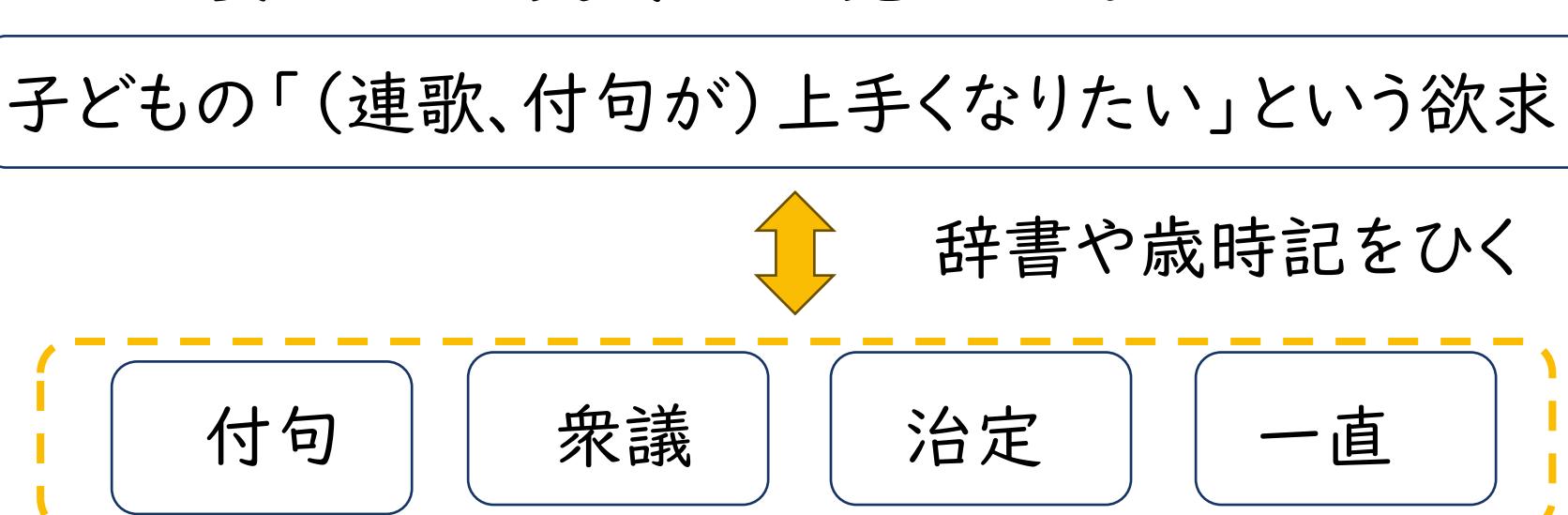
「まなびや連歌」

連歌は「座の文学」といわれ、複数人が同じ「空間」と「時間」とを共有しながら句を詠みつなげ、一つの作品として完成させるものである。

連歌で句を作る（「付句」という）際には、ルール（「式目」という）があり、「和語」を用いるという決まりがある。そのため、付句を考えるときには、思いついた日常的な言葉がそのままでは使えない場合があり、言葉そのものと向き合うことになる。

これまで、連歌を教材とした授業や、子どもを対象とした連歌の実践をおこなってきたが、その経験から、連歌が「言葉（日本語）の持っている力の意識化や、他者とのコミュニケーション力の育成に適した教材である」ということが分かった。

今回の実践では、付句や衆議・治定、一直という活動にあたって、自ずと自ら辞書や参考資料を活用して言葉と向き合い、語彙を獲得していく姿が3つの実践ともに見られた。



今回の授業実践は「三句立」(長句→短句→長句)でおこなった。

一直[付句の直し方]

「一直(いっちょく)」は元来、連歌会などで句を出した際に差し障りがあれば、一度だけは修正して出し直すことができるという意味であるが、現在は宗匠などが句を修正することも含める場合がある。

◆ 一直のポイント

- ① 同じことば・文字に注意する。
 - ② 同じ素材（句材）のことばに注意する。
 - ③ ことばの意味に注意する。
 - ④ 漢語（音読みのことば）や外来語（カタカナのことば）に注意する。
 - ⑤ 助詞に注意する。
 - ⑥ ことばの音数に注意する。

今回の実践における付句の状況と「一直」の意義

生徒の付句とその説明を見ると、作者の思いや考えたイメージが、付句に十分反映されていなかつたり、式目に適っていなかつたりするものがみられる。「一直」は、作者の付句と、その思いや考えのズレをできるだけ少なくするため、また、式目に適うように、言葉を選び直したり、語順を入れ替えたりすることである。

今回の実践では、「授業者が直接おこなう一直」「生徒の座がおこなう一直」「授業者が生徒の座に提案する一直」の3パターンで一直をおこなった。それらの一直によって生徒の付句がどのように変わり、それによって次の付句がどのように変化するかを比較することができるが、一直が最小限にとどめられている点は共通している。特に、一直という活動を通して、生徒が、句への敬意や作者の意図を大切にする意識を持つようになり、その上で一直をおこなうようになったと考えられる。

小村実践

- ・2018年度科研費「連歌を教材とした、言葉の力とコミュニケーション力を育むための指導方法の開発研究」において2年生及び3年生国語で連歌の授業実践
 - ・平野法楽連歌会所属

<今回の授業>

 - ・1年生(3クラス)
 - ・全2時間(+補足1時間) 2024年11月6日、14日
 - ・事前学習なし(“飛び込み”授業)
 - ・**授業者(小村)が直接おこなう一直**

<実践を終えて>

 - ①生徒が主体的に考え、コミュニケーションを取りながら付句や衆議をすすめていたことは、本研究が目指す生徒像に適う様子であった。
 - ②生徒が自ら辞書や参考資料を手に、言葉を一生懸命に探す姿は、豊かな言葉の獲得が期待できるものであった。

今井実践

- ・小村主催「連歌授業のための指導者講習会」受講（2回）

<今回の授業>

 - ・3年生（3クラス）
 - ・全2時間（+補足1時間） 2024年12月9日、12日
 - ・事前学習：連句
 - ・「一直解説プリント」を配布して**生徒の座がおこなう**
一直

<実践を終えて>

辞書や歳時記を引き、言葉を精選する姿や、一直の際に語順や助詞の適不適について検討する姿は、豊かな言葉の獲得が期待できるものであった。また、これらの連歌実作における学習行為は学習者の語感を磨き、表現意欲を高める語彙指導としての可能性を感じられるものであった。

